工藤 さくら（東北大学学術研究員・国立民族学博物館外来研究員）

「ネパールにおける酒と邪視（Evil Eye）―ネワールの酒文化を事例として―」

はじめに

本研究は、ネパールのネワール（Newar）を対象として、ネワール社会の酒文化に見られる事象を邪視という観点から論じることを目的としている。邪視（Evil Eye）とは、特定の人や動物等にそなわっている邪悪な力を持つ目あるいは視線を意味する。また、その目に凝視されることによって、子供や動物が病気になったり、土地が不毛になったり、家屋・食器などのモノが破損、食料品が腐敗するといった災因を説明するためにも語られる。

人類学的研究においては、社会格差や不平等な力関係に対する嫉妬心から起こるものとして邪視の説明がなされることが多く、とくに、カーストを有する南アジア諸国を対象とした論考においては、カーストという生まれによる社会的格差を前提として、地位の高い者が低い者へ／低い者が高い者へ放つというもの、一方で、むしろ同ジャート、すなわち社会的立場が同等の人びとのあいだの平等性の不均等によって起こるというものが指摘されている。この点で、邪視とは、妬みや嫉妬という感情を原因としながら、病気や経済の不調、不妊、食物の腐敗などの被害を受けた当事者によって、自らに向けられた目や視線から、社会関係における不均等を確認する説明体系であると言うことができる。

１．本発表の目的

ネワールの酒づくりでは発酵の失敗を「目がいった（Nw. mikha wana）」と説明する。酒づくりにおける邪視の事例では、社会関係上の妬みにその元凶がおかれるだけでなく、その物質自体の状態が邪視に対する脆弱性におおきく関わっている点が指摘できる。特に、湿度を保っているという点は、邪視に脆弱な状態といえる。本発表では、物質の湿度と邪視との関係に注目し、ネワールの酒づくりを事例に、邪視が説明される背景について分析することを目的とする。また、本研究は、妬みや嫉妬という感情が強調されがちな邪視研究に、物質の状況・けがれへの脆弱性という観点を導入することで新たな視点を投じるものである。

２．ネパールの邪視とネワールの邪視、飲食物との関係

ネパールでは、体調不良、子供の病気、女性の不妊についてボクシー（Np. boksi［呪術師］）の目を原因とする邪視の説明が多く報告されている。ボクシーは、女性と連想され、人間のような存在をしており、健康な人間（子供）、健康な（生殖力のある）女性、豊かな田畑、贅沢をするといった行為に対して、妬みを持つ可能性がある不可視の存在である。ネワール社会においても、病気や不妊の原因について「目がついた」のように、目（Nw. mikha）という言葉で説明される。病気の原因として神が触れたことを意味するドース（Np. doṣ［汚れ、罪、間違い］）という説明と比較すると、目を放つ元凶は、神よりも低位の主体であることが想定される【事例⑴ bau biigu［死霊に与える］】。その際の食品は、米飯・生肉・煮豆など水分の多い食品である。ボクシーによる邪視が原因で乳児が病気になると、授乳の前に乳房に唾や足をつけて邪視を払う行為が行われる。邪視は母乳を求め

乳房に集まるとされる【事例⑵ 子供の病気】。ボクシーは女性であることが多いと言われるが、一方で、邪視は、女性が放つとは限らない。女性の額にできたニキビ（Np. garam khaṭiro［(俗称)熱い発疹］）は、異性が見て「熱」を持ったためと言われる【事例⑶ できものと熱】。さらに、邪視は当事者との関係性の親密さを示す。ジャー（Nw. jā 米飯・豆のスープの日常食）を共食する関係間には邪視は発生しないと理解される【事例⑷ 親しさと邪視】。

３．酒づくりにおける邪視

ネワールの酒文化には性的役割が明確で、酒をつくる女性と飲む男性という構図がみられ、酒づくりのうまさは嫁の評価につながる。飲酒は、自己消費よりも祭日や共同体の宴会のために飲まれることから、ネワールの酒は、社会性や祝祭性を持つ嗜好品であると言える。酒づくりに際しては、醸造の過程（①コメを蒸す～発酵の終了、②餅麹づくりにおけるカビ繁殖の終了までの間）で湿度のある状態が最も邪視に脆弱である。醸造用の壺には、木炭、干しトウガラシ、ミントの葉、ターメリックが少量ずつ加えられるが、これは殺菌の効果と邪視よけの他、空気に触れた際に生じるけがれ（Nw. cipa）を防ぐ意味もある。また、餅麹には、糖化・発酵を同時に行うカビ（Rhizopus属, Mucor属）と糸状性酵母（Saccharomycopsis属）の他、細菌も多く含まれる［内村1989］。穀物は発酵自体が技術的に難しいだけでなく、餅麹の有す細菌の増殖によって失敗するケースも想像するに難くない。その点で湿度のある状態は、腐敗と隣り合わせである。

⇒ 食品の湿潤な状態はけがれに脆弱である、けがれによって腐敗する＝邪視と説明される

４．邪視の元凶を曖昧に語ること

【事例⑸ 宴会の酒が「目がいった」】〈2011, 2013年、カトマンドゥ、農民カースト男性〉

1995年頃、自分の兄の結婚式の宴会があったとき、自分の家でつくっていたトォ（醸造酒）が「目がいった（Nw. mikha wana）」になった。「目がいった」とは、発酵に失敗してベタベタになってしまうことを意味している。そのときは、左右手前の家々から少しずつトォを分けてもらい、なんとか宴会を終えることができた。誰かが見たことが原因で失敗したかはわからないが、そうかもしれない。「目がいった」という話は、特に宴会の準備のときによく聞く言い方だ。

家の女性たちは「目がいった」とか「嫌いな人に見られて目がいった」とか「死んだ人が触った」と言う。母親たちは、学校に行っていないから知識がない。だから、自分の感覚でやって失敗すると、いつもそんな迷信をいう。

→ 邪視の原因や元凶について詮索しない　⇒ 年長の嫁の尊厳を失わないための説明体系

４．　課題と展望

・けがれの慣習的理論と邪視についてのさらなる考察　→ 乾や熱／冷の観念とどう違うのか
・説明体系としての邪視の意味論という展開　cf. 白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』（人文書院、2012）
・ネパールの他の民族との比較　ex. キナマ（納豆）と醸造酒の発酵の在来知（東ネパール）

【引用文献】内村泰「東アジアの酒文化」『シンポジュウム・ネパール』pp. 37-44（日本ネパール協会、1989）